
生徒会の切札

1-1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の切札

【Nコード】

N7443Z

【作者名】

1 - 1

【あらすじ】

碧陽学園生徒会…そこには、4人の美少女と1人の美男子(?)がいる。

その中に追加メンバーとして足を踏み入れた2人目の男は文武両道の天才(天災?)でゲーム名人!?

そんなオドリ主・豹堂真ヒョウドウマコトの織り成すドタバタ劇!

これが処女作なため、誤字・脱字があるかと思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

存在しえないプロローグ（前書き）

とある作者様に感化されて書いてみました。

今回はプロローグのみです。

これからよろしくお願いいたします。

それでは「生徒会の切札」始めていききたいと思えます。

存在しえないプロローグ

- ルール1 神の存在を受け入れる
- ルール2 彼らに直接接触してはいけない
- ルール3 友達の友達是我ら。それが干渉限界。
- ルール4 企業の意向は何よりも優先される
- ルール5 スタッフは、個人の思想を持ち込むなかれ
- ルール6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である
- ルール7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない
- ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては企業の利益のために
- ルール9 性質上、学園の保守は最大の命題である

追加ルール 今年の生徒会には気をつける

存在しえないプロローグ（後書き）

うーん：プロローグだけでよかったのだろうか…

？「まあいいんじゃないやね？原作もこんな感じで始まるわけだし。」

そうだよな…ってあんた誰！？

？「あ？俺は…てちよつとまって！何で名前伏字なんだよ！あらずじで名前出てるから出したっていいだろ！？」

えー まだ本編入ってないしー

？「こいつ…」

まあ次回には名前出るかな？次回設定か本編をやるし

？「まあ、それならいいか…」

てなわけですまた次回お会いしましょう それではー

駄弁る生徒会？（前書き）

遅くなりました

このような小説に3件ものお気に入り登録があったこと感謝いたします

それでは生徒会の切札「駄弁る生徒会」始めていききたいと思えます

駄弁る生徒会？

「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらない人間になったのよっ！」

まどろみの中にあつた俺の意識が、会長のどこかの本の受け売りの様な言葉によつてもどつてくる。

折角気持ちよく寝ていたのに…。でも会長にはいい事をいつたと働かない頭を使いながら思う。

初めて経験したことも、何度もやっているうちに馴れて新鮮な気持ちを感じなくなるからな。

初めての一本背負い。

初めての面打ち。

初めての瓦割り10枚。

初めての…。って、ここまで武術関連ばかりじゃないか？

あ 自己紹介が遅れたな。

俺の名前は豹堂真とらたけまこと。この碧陽学園生徒会の会長補佐の役職についている。

ちなみにこの物語の語り部で、主人公でもある…。急に俺は何を言い始めたんだ？主人公とかつてなんだ？…。まあいいか。

さて、そろそろ鍵がへんな事を言つて、会長を慌てさせるころかな？

「じゃ、童貞も悪くないってことですか？」

「「ぶっ！」」「…こいつは…俺の予想をはるかに超えたこと言いやがった…」。

おそろくうちのお子様会長は涙目で杉崎を睨んでいるだろう。何で分かるのかって？経験則だよ うん

「今の私の言葉から、どうしてそんな返しが来るわけ？」

「甘いですね会長。俺の思考回路は基本、まずはそっち方向に直結します！」

「なにを誇らしげに！杉崎はもうちょっと副会長としての自覚をねえ……」

「ありますよ、自覚。この生徒会は俺のハーレムだという自覚なら十分」

「ごめん。副会長の自覚はいいから、そっちの自覚を捨てることから始めようね」

相変わらずだなあこの二人はと思いながら二人を眺める…おっとこの二人の紹介もしないとな。

一人はこの生徒会の会長・桜野さくらのくりむだ。

どこからどう見ても小学生としか思えない容姿・頭脳のスーパーお子様。

よく高校3年まで進学できたものだ　ほんとに

もう一人はこの生徒会の数少ない男子の片割れの杉崎すぎさき鍵。

見た目はかっこいいのに、常日頃からハーレム　ハーレム言っているせいかそこまでもてない二枚目半な男。

まあそれは理由があるからなんだがな　ちなみに俺の親友でもある

「あれ？真起きてたのか？てつきり当分起きることないと思ったんだけど」

「おっす　おはよう　相変わらずだなお前は…会長を口説くんなら後にしてくれ　あとに」

「く　口説くんじゃないわよ！まったく…」

そっいいながら会長はさきほど吹きだしたお茶を、ティッシュで吹

いてそのティッシュを丸めてゴミ箱に投げようとする
てか片目を閉じてまじに狙ってるよこの人…ほんとに子供だなあ…
そう思いながら俺は鞆からP Pを取り出す
今日は何しようかなあ…モン ンでもいいしファンタシー ターで
もいいし…

「かいちよー」

「なによお」

「好きです。付き合ってください」

「にやわ！」

そんな会長に対して鍵が唐突に告白してティッシュが俺の目の前に
飛んでくる まあどうでもいいや
よし 今日はパワ ロでオールポジション作るまで粘るか とりあ
えず最初はキャッチから…

「なんで杉崎はそんな軽薄に告白できるのよ！」

「本気だからです！」

「嘘だ！」

「『ひ らし』ネタは古いですよ会長…」

「大体杉崎にどこに本気があるのよ…生徒会に初めて顔出した時
のせりふ 覚えてる？」

「えつと…なんでしたっけ？『俺にかまわず先に行け！』でしたっ
け？」

「ちなみに俺は『ナズエミデルンデイス(OWO#)』でしたね
確か」

「しよっぱなからどんな状況よ！それと豹堂！仮面 イダーは電
しか見てないわ！」

まじかよ ブ イドもいい作品だと思っただけどなあ…ネタ抜きで
てか会長も仮面 イダー見てたんだな

「あれ？違いますか？じゃあ…」ただの人間には興味ありません
宇宙人 未来人 「」

「危険よ杉崎！いろんな意味で」

「大丈夫です。原作派ですから」

「何の保障！？あとアニメの出来は神だよ！？」

「…二期はどうして作画がけい ん！つぼかつたのか…」

「やめなさい！そこには触れちゃいけないわ！」

ゲームの画面に集中しつつ鍵に便乗して会長を弄る

お！天才きたこれいいとこまでいけるんじゃないかね？！

「皆好きです。超好きです。皆付き合つて。絶対に幸せにしてみせるから。」

鍵がこの生徒会に顔を出した時のせりふを言う まあ俺そんな時いな
かつたけどね

「そうよそれ！まったく…誰でもいいから付き合つてなんて誠実じゃないわ！」

よく言うよ…鍵がそんなせりふを言ったのも こういう考え方を
するようになったのも会長のせい というより会長のおかげなのに

「一途なんです！美少女に！」

「括りが大きいわ！」

「希少種ですよー美少女。それによくありませんか？最初から「俺は
！ハーレムエンドを目指す！」って宣言するの」

「あなたはそこらのギャルゲ主人公とは基本スペックが違いすぎる
わ」

「確かに…鍵は主人公の友人のギャグ要員つて方が似合つてるかも
な。まあ俺もだろっけど」

「おい真！お前はなんでちよくちよくしか喋らないの！？そして俺

の親友だよな?!なんでそんな俺に厳しいんだよ!」

「厳しい?俺はただ単に事実を述べただけだけだ?」

「そ・そうよ!豹堂の言うとおりよ!」

鍵が「顔はいいのにー!」とか言っているが無視無視

若干涙目になりながら鍵は俺の前にあつた会長の捨てそこなつたテ
イツシュをゴミ箱に投げ入れる

「杉崎つてさ さりげないところで優しいわよね…無意識に」

「え?…こういうギャップって好感度上がるでしょ?」

「狙い!?しまった!あたしの中の杉崎への好感度は若干上昇して
しまったわ!?!」

この二人はほんとに仲いいなあ こんなに騒いで…つて!

「うああああああああああ 炎上したああああああああああ

あ

「急にどうした!?!」

うっ…畜生…またこいつ炎上しやがったよ…やべ まじで涙出てき

た…

そんなこと思いつながらゲームを終了して別のゲームに入れ替えてい
ると生徒会室の扉が開いた

「キー君 アカちゃんをいじめないの そしてニユー君…大丈夫?

廊下中に声が響いてたけど…」

この人は紅葉知弦さん 俺の先輩でおこさま会長とは違い出るところ
は出てる綺麗な先輩だ

クールビューティーという言葉があう人だ ほんとこの二人が親友

って信じられないな…

ちなみにニュー君って言うのは俺のあだ名だ

真 しん new ニュー

ってな感じのあだ名 まあ個人的にも気に入っている

「やだなあ知弦さん 弄ってるんじゃないかって辱めてるんです」

「心配しないでください知弦先輩…これから別の世界に行くんで」

「余計に悪質よ？それ あとニュー君現実逃避はいいから なんかに厨二臭いわ」

グフツ！…じ 実際逃げてる上に俺の趣味的にあってるから反論が出来ない…

「大丈夫です同意の下ですから てか今日集まり悪いですね俺のハレム」

「ハレムじゃなくて生徒会ね それにキー君のそういうところ直せないのかしら？」

「ぐ…でもこれが俺ですから！ これが俺のすべてですから」

「つまりお前はその程度の男ってことだな」
あ また鍵が涙目になった 相変わらずこいつ弄りやすいな（S
つけ全開）

「まあ 私はキー君のそういうところ 嫌いじゃないけど…少しは改善するべきじゃないのかしら？」

「く…でもこういう人こそ落ちたら激しいにちがいな」

「あ それは正解 私小学校のころに好きな人に1日300通送ったりして最終的に精神崩壊まで追い込んだりしたし…あなたはどうかしら」

ガクガクブルブル そのことを聞いた俺たち三人全員青ざめた顔で知弦先輩を見る…

そんな中鍵が口を開いた

「分かりました…」

「あら それを聞いても私を受け入れてくれるの？ いま私の好感度がぐんと」知弦さんとは 体だけの関係を目指します！」「…」

ハア…鍵のアホ…そういうのがあるから三枚目って言われるんだよ

「お前は今日絶好調ですね！」

あれ？俺声に出してないよね？ あれ？

「声におもいつきし出てましたからね！？なにその「え！？」って顔！」

今日の鍵は精神的にズタボロだな 主におれのせいで

そんな鍵とのやり取りをしているうちに会長がどこからお菓子を出して食べようとしていた

「「太りますよ」「 おつと鍵と被った まあ誰しもが思う事だもんな

「ふ 太らないよ 私太りにくい体質だし」

そう言いながら会長はお菓子を口の中に放り込む

その刹那 知弦先輩と俺はアイコンタクトを交わす

「えつとこの問題は…『メタボリックシンドローム』ね よし正解つと」

「近年多いですよね メタボな人って この年でメタボって人もちよくちよくいますからね」

「…」

この会話を聞いた会長が涙目の状態で椅子から崩れ落ちる…その間

に知弦さんとほくそ笑む

そのとき鍵がこっちを見て青ざめてたように見えるけど 気のせい
だろう

そして鍵が会長に近づいていく

「会長 心配しないでくださいもし太つたら…」

「え す 杉崎 太つて醜くなった私も好きでいてくれるの？」

「その時は…仕事に生きればいい」「リアルアドバイス?!」

「俺 陰ながら応援しますから！ ブログに匿名で励ましのメール
送りますから」

「陰からなんだ！ 匿名なんだ！ 太つたら見捨てるんだ！」

「だから太っちゃ駄目ですよ 太っちゃ」

鍵が笑いかけながら会長にそういうが お前さらつと酷いこと言っ
たよな

まあ それが杉崎鍵って人間なのだろうけどさ

そうこうしているうちにまた生徒会室の扉が開いて残り二人のメン
バーが入ってきた

駄弁る生徒会？（後書き）

どうだ！？

真「長いし読みづらい 出直せ」

グサツ（胸にルガーランスが刺さる）

真「てか 今回で深夏と真冬はでてこないのな」

まあ 自分の執筆が遅いせいで話の進行も遅く…

真「お前のせいだな つまりは んで？ 次回の投稿予定は？」

うーん…年末だから実家にも行かないといけないし それに大掃除

も…

真「まあ こんな駄作者だが気長に待っていてください」

ほんとに申し訳ない それでは次回の駄弁る生徒会？でお会いしま

しょう

それではー

主人公設定（前書き）

次話の前に主人公の設定をやっておこうかと思えます
すこしネタバレ的な要素が入っております
それでも良いという方はこれから先を読んでください

主人公設定

名前

豹堂真ひょうどうまこと
旧姓：芹沢せりざわ

年齢

16歳

所属

碧陽学園2年B組

身長

167cm（ただし外見や武術における威圧感によってそれ以上に見える）

体重

58kg（決して貧弱というわけではなく内に引き締められている）

趣味

PCいじり・ゲーム・読書・体を動かすこと

外見

クォーターであり金髪で目の色が蒼という日本人離れた容姿
目が少し釣りあがっていて怖い印象を受ける
肩まである後ろ髪を一つに束ねている

性格

前述の外見のせいで初対面の相手には大半の場合避けられる
しかしその性格は友好的で友人や彼を慕う後輩も多い
他人に向けられる好意に対しては敏感

だが本人がそのような体験をしたことがないため自分に対する好意には疎い

中学のころはとある事情でかなり荒れていた（しかしその荒れていたおかげで鍵と知り合った）

そのため中学時代の一部の生徒にはかなり避けられている

備考

もともとこちらの地方の出身ではなく前述の事情で中学入学前のころにこちらに越して来た

現在祖父との二人暮らしで、祖父の経営する道場の師範代補佐として過ごしている

ゲームが大好きで、杉崎と深夏曰く「真冬並みのゲーム廃人」
運動神経もよく、深夏と同じく部活の助っ人によく呼ばれる
近辺の不良がすぐ頭を下げるほど喧嘩も強いらしい

杉崎は中学からの知り合い、会長・知弦・深夏は高校1年からの知り合い

真冬とはネット上では過去に何度もあっていたが、現実では真冬が入学前に一度あった程度

主人公設定（後書き）

今回は本家の主人公 杉崎鍵の登場です

鍵「何で今回は俺？」

いや 真には見せないほうがいいかなあ と個人的に思ってた

鍵「へー とりあえず聞きたいんだけど…」

はいはい なんででしょう？

鍵「真のプロファイルの”旧姓”っていったいなんなんだ？」

あー…そこは後々明らかになる予定だからいまはスルーで

鍵「なんだそれ？」

まあ 真にも悲しい過去があるってことだよ

鍵「まあ 本人から聞いたほうが手っ取り早いもんな」

そだね てことで今回は設定のみですいませんでした

次話もなるべく早く書き上げますので 今後ともよろしくお願ひします

それではー

駄弁る生徒会？（前書き）

今回は駄文の上に詰め込みすぎたためにちょっと長いです
そして今回真冬のフラグを若干立てようかと思えます
今年最後の投稿です

それでは駄弁る生徒会？ 始めて行きたいと思えます

あ あとお気に入りが入りが10件行っていました
本当にありがとうございます

駄弁る生徒会？

「うーっす」「おそくなりましたー」

対照的な掛け声で二人の美少女が生徒会室に入ってくる

うーっす と気の抜けたような挨拶をしながら入ってきたのは椎しいなみなつ名深夏

俺や鍵と同じ2年B組の所属で 生徒会副会長の役職についているスポーツが得意…というより好きでよく(俺も一緒にだが)部活の助っ人に行っていたりする
碧陽に入学してから時々スポーツなんかで俺と勝負とかもしてる…
勝率？五分五分だよ

深夏に隠れるように入ってきたのはこの生徒会メンバー唯一の1年生 椎名真冬しいなまふゆだ

深夏とは対照的に白い肌と色素の抜けたような髪のおとなしい印象をもつ女の子だ

深夏の影響なのか分からないが男が苦手らしい 大丈夫かな俺…

ちなみにこの子とは昨日初めてあったためにいまいちどんな子なのか把握していない

でも鍵と深夏曰く「お前と同類」だそうだ…同類ってどういう意味だろう？

「お？真冬ちゃん 鞆のストラップ変えた？」

「え あ はい でもよく分かりましたね」

「大丈夫！ 真冬ちゃんのことは何でも把握しているつもりだから！」

「あ ありがとうございます…」

おい鍵 真冬ちゃんひいてるぞ そんなことしてると後ろから…
ガチッ！ 深夏が鍵にヘッドロックをかける あーあ…俺知ーらね
っと

「おい鍵！ あたしの目の前で真冬を口説くんじゃねーよ！」

「うう…ギブギブ…ちょ 見捨てないで 真！ 助けて！ いやま
じで！」

はあ…まったくしょうがねーな…

「深夏 そこらへんにしとけ…流石にそれはまずいぞ」

「ちえー」と言いながら深夏はヘッドロックをといていく

「ま 真 ありがとう たすか」そういうのは俺がやってやるって
おい！裏切ったなまこ…」

そう言いながら今度は俺が鍵にヘッドロックをかける
鍵が俺の手を叩いてギブって言っているがこの際無視

「でもお前さつき深夏が技をといた瞬間に若干残念そうな顔したよ
な…まさか」

「え！？ ご 誤解だつて！ つておい深夏！ 右手を振りかぶ
グング ル！』ゴハッ！」

グチャ！

鍵の顔辺りから聞こえてはいけない音が聞こえた気がする
力を緩めると鍵が力なく崩れる…

その上深夏の右手が赤く染まってなんかないぞ…み 見えないって
言ってるだろ！

そう思いながら俺は自分の定位置である場所に座る ちなみに俺の
座っている位置は

会

	深	鍵	
—	—	—	—
	— 真	— 知	
—	—	—	—

俺

という感じだ 俺は深夏と真冬ちゃんの間座っているという感じになる

真ん中の円は何かって？ 会長の大好きなお菓子「しっと チョコ」だ ちなみに俺も大好きだ

「あの…」

「ん？ どうしたの真冬ちゃん？」

俺の右隣に座っている真冬ちゃんがオズオズと俺に対して話しかけてくる

よかった…昨日の顔合わせの時の第一印象最悪だったからなあ…

「あの…豹堂先輩が「真」え？」

「真でいいよ 呼び方 そんな硬っ 苦しい呼び方は苦手だから」

「でも…」

「うーん じゃあ 『真先輩』でどう？ その方が呼びやすいかな？」

「じゃ じゃあ今度からはその呼び方で…」

よかった…いまいち真冬ちゃんとはコミュニケーションとれるかな 安だったんだよな…

これで一歩前進 まずは仲良くすることから始めないとね

「…流石だな真 男が苦手な真冬がまだ2回しか会ってない男のと名前と呼ぶなんて…」

「ん？ そうか？ まあ俺きっかけで男に対する苦手意識を払拭してくれればいいんだけど」

「いやそういう意味じゃ…まあいいか」

「そ それで真先輩 さっきの続きなんですけど…」

「あ そうだったね それで何を言おうとしたの？」

「はい…真先輩のそれ…」

と言いながら俺のP Pを指差してくる…

「これ？ いやぁ これからモン ンでもやるつかと」「やつぱり！」「うおー！」

真冬ちゃんがものすごい興奮して顔を近づけ…って！？

近い近い近い！！真冬ちゃんの顔が俺の目の前にいいいいいい！！！！（真は異性に対しての免疫は高くないですby作者）

「真冬もやってるんですよ！モン ン！」

「そ そうなんだ…」やばい 多分俺の顔真っ赤だ

「はい！ でも周りでモン ン…というより趣味の合う友達がいなくて…」

だから！ と言いながらさらに顔を近づけてくる やばいやばいやばい！！触れる触れる触れる！！

と思った瞬間に急に真冬ちゃんが離れる 助かった…でも何で？よく見ると知弦先輩が真冬ちゃんの肩を掴んで椅子に座らせていた

「こら真冬ちゃん ニュー君が困ってるでしょ（ま まずったわ

まさか真冬ちゃんがこんな大胆な行動に出るなんて…）」

「でも真冬！ 真先輩とゲームの話をするために顔をあんな

に近づけるの?」:!/!/」

真冬ちゃんが真っ赤な顔をしてこっちを見てくる

思わず顔を背けたけど多分いま俺の顔も真っ赤だと思う

コホン と可愛いらしい声で仕切りなおす真冬ちゃん

「ほ 本題なんですけど もしよかったらで良いんですけど 真冬と一緒に一狩りいきませんか?」

「え!? あ ああ 俺で良かったらいつでも良いよ」

「ありがとうございます!」

というわけで 真冬ちゃんとモン ンをすることになった…会議は?

鍵 side

「いつつ…」

さつき深夏に受けた攻撃で刈り取られた意識が戻ってくる

てか 真も真だよ…なにもそんなこと言わなくても…

まあ 確かに俺も悪いんだけどさ…それを言うのはやめてほしいよ
とりあえず体を起こして自分の定位置に座る

そしてさつきの事を言おうと真の方を見ると

「よっしや部位破壊! 真冬ちゃん! 援護よろしく!」

「はい! その間に真先輩は回復してきておいてください!」

「了解!」

真冬ちゃんと一緒にモン ンをやっていた

…え? 真って真冬ちゃんと昨日会ったばかりだよな?

それなのにもう名前と呼ばれてる…なんか悔しいな

「お 鍵起きたのか」

「あ ああ にしても俺が気絶している間に何があったんだ？」

「まあ…真のいつもの奴だよ」

納得した あいつのフレンドリーさは異常だからな

この前なんかゲーセンで対戦した初対面の相手と気づいたらメアドとか交換してたし

そんで同類である真冬ちゃんとゲームの世界に狩りに出かけたって
ことが

でも そろそろ会長がご立腹だから会議を仕切り直そうか

side out

ところでさ と鍵が深夏と真冬ちゃんに話しかけてくる

ちようどクエストが終わって一息ついていたところだったので真冬
ちゃんが応答する

「深夏と真冬ちゃんは『初めてのころはあんなに楽しかったのに』
みたいなことってある？」

「なんだよやぶからぼくに」

「いや さつき会長が言ってたんだよ『世の中がつまらなくなった
んじゃないで自分がつまらなくなったんだ』って」

「改めて考えても久々にいい言葉だよな 会長の受け売り いった
いどこの本に書いてあったんですか？」

「久々とは失礼な！だ 大体 本で見つけた言葉なわけないじゃない
い！」

会長 こっち向いて目を見て言いなさい

「真冬はお化粧…コスメですかね」

「化粧？」「今日はよく鍵と言葉が被るなあ」

「はい 子供のころはお母さんがお化粧しているの見てて羨ましい
と思つてて 中学のころに初めて買った時はすごく嬉しかったんで
す でもいまだと最低限のメイクしかしなくなつて…」

「ああ なるほどね でも大丈夫！ 真冬ちゃんは化粧しなくても
かわいいから！ というより真冬ちゃんの美貌を隠してしまう化粧
なんてないほうがいい！」

「あ ありがとうございます…」

また口説いてるよ…てか ほんとにこりねーな鍵は

まあ 確かに化粧が無いほうがその人の本当の姿って感じて嫌いじ
やないけど

「おい鍵！ また真冬を口説いてんじゃねーよ！」

「や やだなあ深夏嫉妬するんじゃないよ お前も魅力的だからさ」

「いやいや 嫉妬じゃねーから…」

「深夏にも結婚したら真冬ちゃんか妹になるという魅力が」

「しかもあたし本人の魅力じゃねえ！」

やばい 今日の鍵絶好調だ どうせ「ヤキモチ焼いててかわいいな
あ」とでも思つてるんだろ

「ヤキモチなんて焼いてねーから！」

「おお！ ついに以心伝心まで！ ゴールインは近いぞ！」

駄目だこいつ 最早手の施しようがない

「怖いよ…そう思い込めるお前が怖いよ…」

「思い込み？ 仕方ない そういうことにしてあげ すみません調子乗りましたその拳を下ろしてください真様」

流石にこれ以上はまずいと思ったので拳を振りかぶって鍵に近づいたら鍵が土下座してきた
土下座するなら最初からすんなつての…

「この光景を見てると 鍵の方が成績良いなんて思えねーよな」

「キー君は優良枠で入ってきたのよね…ニュー君のほうがふさわしいと思うんだけど」

「いやいや 俺なんか優良枠なんてそんな「終盤2回のテストわざと間違えたくせに」…」

知弦先輩が笑いながら小声で言ってくる

なんでこの人知ってるんだ？ 俺が鍵を生徒会に入れるために”わざと”テストの点数下げたこと

やっぱりこの人だけは敵に回しちや駄目だ

「大体この学校の生徒会役員の選抜基準おかしいのよ！人気投票や優良枠もそうだけどメンタル面もきちんと評価に加えるべきだわ！」

「俺はこのシステムいいと思いますけどね」

この碧陽学園の生徒会役員の選抜方法は他の学校とは一味違う

他の学校のように選挙などは行われず 純然たる人気投票によって役員が決まる

しかしそれでは流石にまずい ということでの妥協案が先ほど話に出てきた『優良枠』だ

これは学年の成績優秀者が希望すれば生徒会に入れるというもの
今期はその制度を使って鍵が生徒会入りした

「よくよく考えたら　なんで真がここにいるんだ？」

「そういえばそうだよな　俺が折角入学当初かなり低かった成績を
トップまで上げたのに……」

「知らねえよ　一昨日こつちに戻ってきたら急に「お前　今日から
生徒会役員な」って言われたんだよ」

しかも会長補佐って言ういまいち分からない役職でな

「そういえば　何で真先輩はすぐに生徒会に来なかつたんですか？
今学期始まって結構たつたのに」

「あー　俺実は3月の中旬くらいからアメリカにホームステイして
たから」

そのためか時差ぼけなんだよなあ……ようやく眠気がとれた所だよ

「びつくりしたよ　帰ってきたら鍵が生徒会に入ってるんだもんな
まあ予想は出来てたけどな」

「すごいですよね　その点に関しては真冬　杉崎先輩が大きく見え
ます」

「「真冬^{ちやん}　それは錯覚だ　鍵に尊敬するなんて末期だぞ」

「頭がいいのは事実だぞ　深夏に真　まあ真には劣るけど」

「動機が不純なんだよ！　お前が入るなら真のほうがマシだ！」

まあ俺はその逆で鍵を生徒会に入れようと思っただけだな

「成績が良いだけって言う理由で入れるのはおかしいよ！　そのせ
いで杉崎みたいな問題児が入ってきて」

「生徒会のメンバーを全員メモメロにしたのは悪いと思ってますが
……」

「誰一人なつてないわよ！」

「ええ!?」

「なにその新鮮な驚き! 自信過剰も甚だしいわね」

「そんな…まだ会長しか落ちてなかったなんて…」

「私も落ちてないわよ! 杉崎なんかより豹堂の方が良いわよ!」

突然俺に話の矛先が向けられる

鍵がこつちを睨んでいる いや 俺にはそついう気持ちないから

「でも俺が一番恐怖するのは会長が最初に言ったことなんですよね
「え? どういうこと?」

「つまらない自分になる つまり今のこの状態を楽しんでいるけど
最終的にはそれが当たり前のように感じてしまつと思つと…」

「たしかにそれはあるよな」

「あー それは分かるかも 家が経営者だから生活基準を高くした
らなかなか下げられないよね」

「なるほど それで会長は美少年をはべらせるのが趣味になったと
「前々から俺にネットを使って調べさせたのもそのためだったん
ですね?」

「ないわよ! そんな趣味! あと豹堂! あんたが言つとしゃれにな
らないからやめなさい!」

「さらには札束で人の顔をペチペチ叩くのがやめられないと…」

「いまではこの碧陽学園に『桜野くりむ 被害者の会』が設立され
たとかされてないとか…」

「どんな貴族よ私! そこまでのスケールじゃないから!」

「貧乏な今では家に侵入してくるアリの足を一本一本もぐのが唯一
の生き甲斐と」

「他にもミミズや昆虫を虫眼鏡で焼くのもよくやっているか」

「ただの根暗じゃないのそんなの!」

口論では会長は体力が低いから口論では鍵や俺には勝てない

やっぱり会長弄りは楽しいな

「真冬も…そうはなりたくないですね でもどうすればそうなるんでしょうか？」

「どうなんだろうね 世の中で勝ち組って言われている人たちは何か自分の中でやりたいことを見つけてそこそこの人生を送っているんだろうな」

「そこそこ幸せ…ねえ 駄目だな」
「ん？ どうした？」

鍵がつぶやいたことに俺が反応する
それにつられて会長や知弦先輩達も鍵を見つめる

「俺は ハーレムエンドを目指す！」

そう鍵が高らかに宣言する

俺はそんな鍵をじっと見つめる

俺以外のメンバーは鍵の言葉に呆れている

「妥協はしても 高い位置で妥協してやる！ 美少女をはべらせて『美少女にはもう飽きたな』って言えるまで上ってから妥協してやる！」

「まあ 目標を持つのはいいことだよな」

「ああ そのスタンスは悪くないよな」

「そうですね 何も考えず上に上るのはいいことですよね」

知弦先輩は言葉を出さず 鍵に対して微笑んでいる

生徒会のメンバーが次々に鍵の発言に賛同する

ただ一人 会長だけが

「えー 疲れるのはいやだよ…」

と発言する

この人は ほんとに駄目人間だな 他のメンバーも呆れている

「じゃ 今日の会議はここでしゅりよ」

ここで会長が飽きたのか 会議を終了させる

そしてすぐさま鍵にアイコンタクトを送る

さあ 俺たちの仕事の始まりだ

駄弁る生徒会？（後書き）

どう（ry

真「長いわ！ どんだけ伸ばしてるんだよ！」

い いや 区切りがいい部分まで書いてたらこんなに長くなっちゃた
真「なんだよそれ……」

ま まあ次話は駄弁る生徒会の終盤だから

真「あんまし関係なくね？」

さいですか

今回の投稿で今年最後……というよりも今日で今年も終わりですね
皆さん

作&p・真「よいお年を！」

来年も早めに投稿したいと思えますので来年もよろしくお願いします
それでは

駄弁る生徒会？（前書き）

皆さん！

あけてまして！

オメデトウございます！

今年もノロノロですが 更新頑張って生きたいと思います！

それでは駄弁る生徒会？ 始めていきます

駄弁る生徒会？

知弦 side

「…で 杉崎と豹堂はまた生徒会室に残ってるんだ」

アカちゃんが生徒会室を眺めながらそうつぶやく

あ 今はニュー君じゃなくて私 紅葉知弦が語り部をさせてもらうわ
その言葉に対し深夏が首を鳴らしながら応答する

「だから対応に困るんだよな あたし達と話すために生徒会の雑務
を全部引き受けてるんだもんね 真が手伝っているのもいまいち理
解できないけど」

「ま 真冬は杉崎先輩のこと嫌いじゃないですよ？」

真冬ちゃんがゲーム画面から目を離して深夏の言葉に反応する

「この学校であいつのこと嫌いなやつなんていないわよ 杉崎はハ
ーレム言わなきゃ彼女くらいできるし 豹堂は何もしなくても彼女
できるわよ」

「あれ？ アカちゃんもしかしてキー君とニュー君のこと…」

「そ そんなことないわよ！」

アカちゃんが顔を真っ赤にしながら反論する

ニュー君の話をした途端に真冬ちゃんが反応したのもちよっと気に
なる

それよりもアカちゃんよ！

ああ…アカちゃんのあの顔いいわあ…

「なあ真」

「うん？ どうした鍵」

今の今まで作業に集中していた鍵が俺に話しかける

「別にお前も残って作業を手伝うことないんだぜ？ 実家の手伝いもあるんだろ？」

なんだそんなことか：

「いいさ 俺が好き勝手やってるだけだし それに…」

書類を机において笑みを浮かべながら口を開く

「前にも言っただろ？ 一人で抱えるな 今のお前は一人じゃないってな」

一瞬鍵がポカンとした表情をする

しかしすぐに顔を綻ばせ こちらに笑いかけてくる

「ああ そうだったな！ 俺がミスしたらお前がフォローしてくれるもんな！」

「え？ そこに関しては限度があるぜ？」

「な？！ おいおい それは酷くないか？」

お互いに笑いあいながら 冗談を言いながら作業を再び開始する

こんな日常が俺は大好きだ こんな生活をこれからも続けていきたい

碧陽学園生徒会 ここはつまらない人間達が毎日笑いあう幸せな空間である

駄弁る生徒会？（後書き）

今年初の投稿です！

真「今回短いな…なんでだ？」

実は投稿の前にチューハイ3缶あけちゃ（グチャ！）

真「この駄作者が…まじめにやれ！」

まじですいませんした

真「とりあえず今回で『駄弁る』は終了か…」

だね 次回からは『放送する』をしていこうかな

真「ああ あの力オス回か」

まあそういうな 絶対楽しいから

次回も早めに投稿しますのでよろしくです
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443z/>

生徒会の切札

2012年1月3日01時50分発行